

「進化」20年 偽メール猛威

攻撃9割の入り口に

コンピュータウイルスを拡散する「偽メール」の脅威がかつてなく高まっている。20年以上前に登場した古典的手法だが、多様な犯罪の「入り口」をこじ開ける役割を果たし、サイバー攻撃のきっかけの9割を占めるともいわれる。だましの精度は進化を続け、誰もがリスクと無縁ではられない。

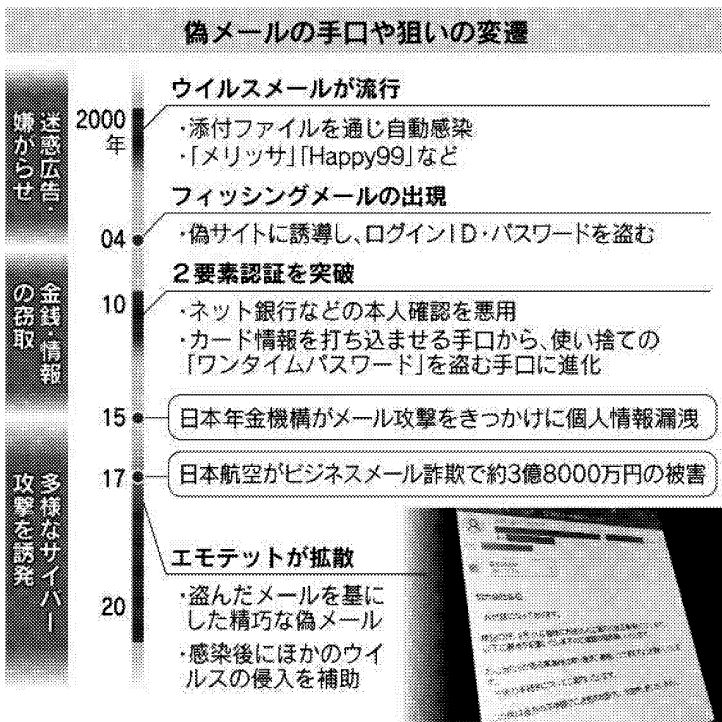
ネットの闇

が相次いだ。

世界で甚大被害

4月25日正午、国内の制庄、全世界で同時刻にパソコンなど約2万6000台に潜り込んでいたウイルス「エモテット」が、全世界で同時に自動停止するようプログラムされた。エモテットは感染した端末からメールの履歴を盗み出し、過去のメールドメインの岡本勝之と呼ばれ、2017年かへの返信を装いウイルスを約200の国・地域で付添付ファイルを送る。実際の連絡が基にならぬ。8カ国の捜査当局が1月、受信者がファームウェアを開いて感染する例に配信システムを丸ごと

「身近な存在で、警戒心を緩ませる」(トレンドマイクロ)の「2要素認証」を突破する手口が、経営幹部の対応に追われる。総務省によると、09年以降の1日当たりの迷惑メール量は11年8月の約15億9000万件をピークに減少したが、再び増



(注)トレンドマイクロなどへの取材を基に作成

おり、知らぬ間に情報漏洩やランサムウェア(身代金要求型ウイルス)の感染原因となるケースも多い。甚大な被害を及ぼすだけに「過去にない大規模な摘発となった(国内の警察関係者)」。

合同捜査に参加したウクライナ警察によると、これまでに欧米の金融機関などで約2700億円(約2700億円)の被害が発生。日本でも20年に日本医師会や京セラが感染の被害を公表するなどの事例が相次いでいる。

インターネットと切り離せない偽メールは進化を続けてきた。トレンドマイクロによると、国内ショートメッセージサー

「最大の弱点は人間」 伝説のハッカーが警鐘



ケビン・ミトニック氏 1963年生まれ。90年代に大手企業など40社以上のハッキングを繰り返し、FBIの最重要指名手配リストに載った。有罪判決を受け、2000年に釈放。逮捕までの経緯は映画化された。現在は米セキュリティ会社で企業や政府機関に対策を指導するなどしている。

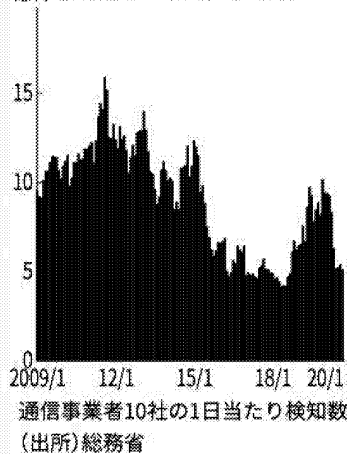
「賞与について」など日常業務に関するシンプルな文面が多かった。ミトニック氏は「日々の同じ作業の繰り返しは誰でもつい手抜きをしがちな」と指摘する。

「賞与について」など日常業務に関するシンプルな文面が多かった。ミトニック氏は「日々の同じ作業の繰り返しは誰でもつい手抜きをしがちな」と指摘する。

行動は深く考えない「ヒューリスティック(発見的)」の組み合わせだとする。偽メールは受信者がこうした簡単な判断をする状態に導く設計になっているという。

かねて「セキュリティ上の最大の弱点は人間」と指摘してきたミトニック氏。サイバー攻撃は高度化するが、時代を超えて不変な「心の隙」が狙われる構図は変わらない。「最も重要なのは一人ひとりが相手のだましの手口を理解しておくこと。企業であれば社員らへの啓発も欠かせない」と指摘する。

迷惑メール数の推移



に減少したが、再び増

加に転じた。迷惑メールにはウイルス感染や詐欺目的などの偽メールが多含まれる。

岡本氏は「偽メールを本物に見せる技術は高まっている」と話す。

終わらぬ攻防

偽メールを巡る攻防は続く。エモテットは制庄されたが、情報処理推進機構(IPA)は今年3月以降、特徴が似た攻撃を19件確認した。

サイバー攻撃対策の民間団体、JPCERTコーディネーションセンターの佐藤研氏は「次のエモテットになりかねない」と警戒を強める。

新型コロナウイルスでテレワークが広がり、深化とともに色濃さを増す「闇」を追う。

インターネットが市民生活に定着し四半世紀。サイバー攻撃のレベルは上がり、匿名性を盾にした中傷、詐欺など悪用も絶えない。ネット社会の深化とともに色濃さを増す「闇」を追う。